

かす　　や　　ち　　か　　え  
糟　　谷　　知　　香　　江

学位の種類	博士（文 学）			
学位記番号	文博第 127 号			
学位授与年月日	平成14年 3 月25日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科（博士課程後期 3 年の課程） 心理学専攻			
学位論文題目	エスニック集団間における態度と行動の発達過程 ——ボリビア日系移住地の事例——			
論文審査委員	（主査） 教授 大橋 英 寿      教授 畑 山 俊 輝 教授 仁 平 義 明 教授 大 淵 憲 一 教授 行 場 次 朗 教授 嶋          陸奥彦			

## 論文内容の要旨

### 第 1 章 課 題

複数のエスニック集団が共存する社会では、他のエスニック集団に対する偏見や差別がしばしば問題となる。偏見とは、エスニック集団など何らかの社会集団やその成員を否定的に評価する心的準備状態を表す。偏見は一つの態度であると考えられるが、態度とは何かということについては様々な意見がある。本論では、態度を純粹に感情的な構成物（感情的要素：偏見）とし、エスニック集団やその成員についての信念（認知的要素：ステレオタイプ）と、彼らに対して選択的に行う行動傾向（行動的要素：差別）とは分けて考える。あるエスニック集団に対する否定的なステレオタイプは、個人のなかに偏見を帯びた態度を作りだす。その態度が何らかの行動を行う意志の形成に影響を及ぼし、差別となって現れると考えられる（Duckitt, 1992；岡, 1999）。

エスニック集団に関する態度は社会化の過程で獲得される。複数のエスニック集団が存在する社会で育つ子どもは、4歳前後までには、エスニックな違いを認識し、エスニック集団に対して肯定的あるいは否定的な態度を表すようになるといわれている。子どもは、周囲の人々の言動やメディアを通じてさまざまな情報を読みとり自己の態度を形成する。そのため子どもの態度はエスニック集団に関する社会の評価を反映したものとなる。社会の中で多数を占めるこ

とによって、あるいは政治、経済など何らかの面で優位な地位にあることによって強い勢力を持つマジョリティ集団に属する子どもの場合、内集団に対して強い愛好を、外集団に対して拒否や反感を示す。内集団への肯定的な評価と外集団への否定的な評価を内面化した子どもは、7歳頃までエスニック集団に関する態度を先鋭化させていく。しかしこの年齢を過ぎると、エスニックな違いについて過度にこだわらなくなりはじめ、極端な態度は青年期までに少しずつ和らいでいく。一方、社会の中で弱い立場にあるマイノリティ集団に属する子どもの場合、社会の評価は内集団を否定的に位置づける。人は、自己の所属する集団を肯定的に評価することを通して望ましい自己評価を行うことができるため、内集団を高く評価する傾向があると考えられる。社会からの評価を内面化したマイノリティの子どもにとって、内集団はアンビバレントな存在となる。7歳頃までのマイノリティの子どもでは、マジョリティである外集団に対して肯定的な態度を、内集団に対して否定的な態度を示す場合もあれば、内集団－肯定、外集団－否定の態度を示す場合もあり、一様ではない。その後成長に伴って次第に内集団を肯定的に評価するようになるが、幼児期と態度が変化しない子どもの存在も指摘されている (Aboud, 1988; Hogg & Abrams, 1988; 松井, 1994)。

エスニック集団に対する態度と行動は社会的な環境の影響を受けるため、ある社会において導き出された発達過程を適用できる対象は限られたものとなる。たとえば、エスニック集団を分ける指標にはさまざまなものがあるが、上のような発達過程は、エスニック集団間に肌の色や顔立ちなど可視的な違いが存在する場合によく当てはまると考えられる。宗教や国籍など目に見えない事柄のみを手がかりとするエスニックな違いを子どもが認識できるようになるのは、10歳頃からであるといわれる (Duckitt, 1992)。

また、外集団に対する否定的な態度が直接差別に結びつくとは限らない。人間の行動は、その対象への態度と行動固有の社会規範の両方に規定されていると考えられるからである。Minardはアメリカのある炭鉱の町における人種関係を調べたエスノグラフィックな研究の中で、偏見がかかった態度、行動は必ずしも一致しないと述べている。彼が調査を行った町においては、炭鉱の職場内や労働組合の組織内では白人と黒人の労働者は融和的だが、その外へ出ると人種間の厳しい隔離を是とする規範があった。白人炭鉱労働者の40%は黒人に対し職場内外とも好意的あるいは非好意的な行動を一貫させていたが、残り60%は場面によって異なる行動を使い分けることを当然と受け止めていた。人は自分の持っている態度の一般的傾向と異なる行動をとることが少なくないのである (Minard, 1952)。

さらに、エスニック集団をとりまく社会の歴史的変化によって子どもの発達過程が変化する可能性がある。アメリカでは1960年代に公民権運動を通じて黒人文化に対する意識が高まったが、このころから黒人の子どもの人種に関する態度に変化が生じたという報告がある。Hraba & Grant (1970) は、Clark & Clark (1939; 1947)による人形選択技法を用いた研究の追試を行っている。Clarkらの研究は、3歳から7歳の黒人の子どもを対象とし、白い肌の人形と黒い肌の人形を見せる。まず、「白人と似ている人形」、「黒人と似ている人形」を選ばせる。すると90%以上の子どもが白い肌の人形を白人、黒い肌の人形を黒人として選択した。幼い子どもにも肌の色による人種的識別ができるといえる。さらに、「一緒に遊びたい人形」を選択させたところ、67%が白い肌の人形を、32%が黒い肌の人形を選んだ。また、「すてきな色の人形」では、60%が白い肌の人形、38%が黒い肌の人形を選んだ。しかしHrabaらによる追試では、「一緒に遊びたい人形」では、白い肌の人形が30%、黒い肌の人形が70%、「すてきな色の人形」で

は、白い肌の人形が31%、黒い肌の人形が69%という結果であった。白い肌の人形と黒い肌の人形を選択する比率がほぼ逆転していた。人形選択技法は、子どもが人形を実際の人間と同じように受け取っているのかわからないといった問題点を指摘されている。しかしここでは、2つの研究が同じ手法を用いながら異なる結果を得たということに注目したい。

生涯発達心理学では、生まれてから死ぬまでの一生にわたる人の行為パターンの変化、そこに作用している心理的特性などを研究する。生涯発達心理学は研究対象を成人期や老年期まで広げただけでなく、独自の理論的観点を持っているといわれる。その中の一つに、発達を歴史的・社会的文脈のなかでとらえようとする点が挙げられる。人間の発達、なかでも社会的側面の発達は、社会・歴史的環境から大きな影響を受ける。また人間は自己を取り巻く環境に対して何らかの意味づけを行い、それに基づいて考え行動するため、同じ環境にある他の人と異なる行為パターンを示すことが少なくない。こうした点に注目すると、あるとき実証的に確かめられた発達過程を別の時点・場所・対象にも適用できると当然視することはできなくなる。発達研究において経験的に実証可能な一般法則の確立を目指すことを否定するわけではないが、別の目標を掲げた研究を行う余地はあると思われる。社会的側面の発達過程を扱う研究は、複雑な要因が絡み合っている人間の行為パターンの継時的変化を言語化し、それに一定の説明を加えることによって人々にその現象の理解を促すこと、これを一つの役割とできるのではないだろうか。この作業を通して他の現象との比較が可能となり、さらに新たな説明がなされる可能性も開けると考えられる (Baltes, 1987 ; Gergen, 1994)。

本論はボリビアの日系コミュニティに暮らす日系人の子どもを対象とする。ボリビアと日本、2つの文化が混在する環境の中で日系ボリビア人の子どもたちは成長する。彼らを取り巻く環境を明らかにした上で、子どもたちが「日系人」「ボリビア人」というエスニック集団に対する態度をどのように発達させるのか、その発達過程を記述することが第1の目的である。また、子どもがその時々の状況や相手との関係を考慮して自らの行動を律していくようになるのは、何歳頃からであろうか。幼い子どもがそうしたことを気にしていないとは限らないが、年齢の上昇に伴ってこの傾向は顕著になると予想される。幼児期に獲得されたエスニック集団に対する態度が学童期にどのように変化するか、獲得された態度が現実の行動とどのように関わっているのかを明らかにすることが本論の第2の目的である。

## 第2章 フィールド

本論のフィールドとなったボリビアのオキナワ移住地は、第2次大戦後開設されたの農業移住地の一つである。オキナワ移住地へは、1954年の第1次移民から1970年の第26次移民まで、沖縄出身の約3,300名が入植した。オキナワ移住地に住む日系人の9割以上は農業に従事しており、1994年の日系人農家一世帯あたりの平均所有農地面積は約300ヘクタールである。広大な土地での農作業はボリビア人を雇用して行われており、日系人の仕事は、彼らを指揮監督し、農場を経営することである。現在、オキナワ移住地には約800人の日系人と3,000人を超えるボリビア人が暮らしている。移住地では日系人とボリビア人が同じ地域に生活しているが、それぞれ別の行政組織を設けており、エスニックな違いは生活上おおきな意味を持つ。移住地に居住するボリビア人の多くは日系人に雇用される労働者かそれと同程度の経済力の世帯である。エスニック集団間で目立った対立があるわけではないが、こうした世帯と日系人世帯の交際はほとんど行われていない。労働者階層のボリビア人に対する日系人のイメージは概して否定的

である。

ボリビアの一人当たり国民総生産は964ドル（1998年）、南米諸国の中では低所得な国の一つであり、ボリビア社会は、日系人にとって魅力的な同化の対象とは必ずしもいえない。また、上下の二重階層構造のあるボリビア社会では、社会的経済的に上昇するには上流階層との人的つながりが重要で、日系人が高等教育を受けてもすぐに社会で活躍する道が開かれるわけではない。新参者である日系人は、上流階層との人脈が少なく社会的上昇の機会を得にくい位置にいる。他方、彼らの先祖の国である日本は、高学歴でなくても働けばそこそこ豊かな物質生活を享受できる社会である。日系ボリビア人の多くは、二世・三世でもボリビアと日本と2つの国籍を持っているため、日本人として日本で生活することも可能であり、実際1980年代から、いわゆる「デカセギ」で日本に暮らす者が増えている。オキナワ移住地と日本のつながりは、移住後、時間を経て弱まるどころか、むしろ強くなっている。以上のことは、日系人がボリビア社会へ同化していく速度を緩やかにしていると考えられる。

筆者は1994年から1998年にかけて、オキナワ移住地において4回、のべ15ヶ月間の調査を行った。このうち94年と97年は日系人の通うN小中学校の日本語校においてボランティアで教師を務める傍ら、子どもたちへの調査をおこなっており、この資料が本論の中心となっている。ボリビアでの調査と平行して、日本在住のオキナワ移住地出身者への調査も実施した。1997年の2月、7月から8月にかけての2回、それぞれ1週間程度の調査を群馬県で行っている。

### 第3章 移住者たちのライフコース——オキナワ移住地の歴史と同郷ネットワークの形成過程——

オキナワ移住地の日系人は、一世、準一世、二世と大きく3つの世代に分けることができる。一世は沖縄で生まれ育ち、移住地を原生林から文字通り切り開いた人々である。準一世は沖縄で生まれ、子どもの頃ボリビアへ移住し、オキナワ移住地で育った人々である。二世はオキナワ移住地で生まれ育った人たちである。入植初期のオキナワ移住地は、人々が一つのまとまった地域に住み協力して生活を営んでいたことから、地域性と共同性を持った地域共同社会であったと考えられる。このころ苦楽を共にしたことは、強い「われわれ感情」を持つことにつながっているようである。その後ブラジル、アルゼンチン、近年には日本へと移住地からの移動が増えるにつれて、共同性を持つ人々が国境を越えて生活するという状況が生じてきた。一世の時代にはオキナワ移住地という新しい故郷が造られ、準一世の時代には近隣のアルゼンチン、ブラジルへ人々が転住・出稼ぎに行ったことにより同郷ネットワークが発生し、二世の時代には日本への出稼ぎブームに伴って同郷ネットワークが更に日本へと広がっていった。同郷ネットワークは準一世と二世が移住地の外へ移動し、そこで定着することを助けたと考えられる。ネットワーク内部での人の移動を容易にすることで、ネットワークの内部に生きる人たちに生活するための枠組みを提供する、すなわち同郷ネットワークが社会化のエージェントとしての機能も担っていると考えられる。

### 第4章 オキナワ第2・第3移住地の学校——過去と現在——

本論の調査を行ったN小中学校は日系人による私設学校として移住地開設後ほどなく開校され、1975年に国立校となり現在に至っている。1997年現在、小学1～5年、中学1～3年の8学年に日系人58名、ボリビア人97名、計109名の生徒が在籍していた。同校では、月～金曜日の午前中、月曜日と水曜日は午後も、国立校として公用語のスペイン語で義務教育を行っている

(以下、スペイン語校)。火・木・金曜日の午後と土曜日の午前中は、日本語教育が行われている(以下、日本語校)。日本語校はボリビアの教育制度上、私塾になる。日系人だけが日本語校にも在籍している。日系人生徒の多くは二世か三世である。

日本のカトリック修道会から派遣され30年近く移住地に居住し教育に深く携わってきたシスターによれば、N小中学校は日系人の学校だという見方が日系人にもボリビア人にもあるという。調査時には、日系人生徒とボリビア人生徒の比率は1:2でボリビア人の方が多かったが、1991年までは、日系人生徒数が常にボリビア人生徒数を上回っていた。84年までは日系人生徒がボリビア人生徒数の3倍以上だった。学校の中で日系人が(少なくとも数の上で)マイノリティになったのは比較的最近のことである。

日系人生徒の家庭の多くは規模の大きな自営農であるが、ボリビア人生徒の親は日系人に雇用されている農業労働者、移住地周辺の村の零細な自営農が多い。日系人は、労働者階層のボリビア人とはたとえ同級生であっても友人関係を持つとしない傾向があるという。N小中学校では、日系人とボリビア人の友人関係は生じにくく、ボリビア人との違いをより強く意識する環境であると予想される。

## 第5章 エスニックな側面の発達過程——「日本人」として育つ——

### 1. エスニック・カテゴリーの内面化

日系ボリビア人は、日本人なのか、それともボリビア人なのか。エスニックな境界の指標は血筋、出生地、国籍など様々である。エスニック集団は、多くの場合、その集団が何者ではないか、つまり他の集団との「違い」によって輪郭を示される。ここで問題とされる指標は象徴的な目印として用いられるに過ぎず、社会のあり方によってどの「違い」が意味を持つかは変化する。ある「違い」が浮かび上がると、他の「違い」は背後に隠れるという性質を持っている(Woodward, 1997)。

移住地で生まれた子どもたちは、自分は「日本人」だと感じる人が多いようである。移住地で通常「日本人」といえば日系人を、「ボリビア人」といえば非日系のボリビア人を意味する。「日系人」という言葉は一部の人がごく稀に使うだけで、普通耳にすることはない。また、ボリビア人は日系人を“japonés”(日本人)と呼ぶ。外部からこのように認識されることは、日系人が「日本人」アイデンティティを形成する一要因になっていると考えられる。自らを「日本人」とする感覚は身近にいる農業労働者とその子弟であるボリビア人との対比から生じていると考えられる。小中学生にとって、「日本人」といえば自分たち日系人を、「ボリビア人」といえば非日系ボリビア人を指している。日本人の血を引くかどうか2つのカテゴリーを区別する基準である。このときの「日本人」という言葉には、厳密には日本で生まれ育った日本人のことも含まれている。日本に滞在している移住地出身の二世から生まれた子供が両親のボリビアへの引き揚げに伴って移住地の学校へ転入する場合も、派遣教員や国際協力事業団職員の子供が転入する場合も、どちらもその子どもたちは日系人生徒たちから同じ「日本人」の仲間として受け入れられる。日本で生まれ育った人と日系人である彼らは同じ「日本人」であるから、日本に対し外国というよりも自分の国のようなイメージを抱く。しかし、もし彼らが日本に行けば「ガイジン」扱いされることが多い。そうした経験を繰り返すうち、自分の中のボリビア人としての部分、日本で生まれ育った人との違いに注意が向くようになる。ここで、「ボリビアで生まれた人はボリビア人」という考えが改めて意味をもつようになる。自己のアイデン

ティティとして「ポリビア人」というカテゴリーが意味をもち始めるのである。日系ポリビア人の用いる民族カテゴリーと、それに込められる意味を概念化して示すと表1のようになる。出生地を基準とする分類は、N小中学校においてはあまり意味を持たない。本論では特に断らない限り日系ポリビア人に「日系人」、非日系ポリビア人に「ポリビア人」を用いる。

表1 エスニック・カテゴリーに込められる意味

他者との「違い」	非日系ポリビア人	日系ポリビア人	日本人	用いられる場所
血筋	<div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">ポリビア人の子孫</div> <span style="margin: 0 10px;">↔</span> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">日本人の子孫</div> </div>			ポリビア
出生地	<div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">ポリビア生まれ</div> <span style="margin: 0 10px;">↔</span> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">日本生まれ</div> </div>			日本

「日本人」：日本人の子孫・日本生まれ 「ポリビア人」：ポリビア人の子孫・ポリビア生まれ

## 2. 自由行動時のグルーピング——水飲み場での行動観察から——

小1～中3までの日系人生徒55名（男25名、女30名）を対象に行動観察を実施した。観察したのは、休み時間に水飲み場へやってくる時のグルーピングである。生徒用の水飲み場はN小中学校に一つある。生徒たちが水飲み場へやってくる時に、単独であったか複数であったか、複数の場合はその中にポリビア人が含まれているかどうか、すなわち「単独」「ポリビア人と一緒」「ポリビア人と一緒ではない（＝日系人と一緒）」の3つのカテゴリーに従って記録した。記録を取ったのは1997年10月6日（月）から10日（金）の5日間である。ただし6日は大雨が降って道路が不通となり半数以下の生徒しか登校しなかったので分析から省いた。残り4日間の観察時間は約140分で、この間の水飲み場利用回数は一人当たり平均6.0回であった。

4日間のうちに一度でもポリビア人と一緒に来ることがあった者と一度もなかった者の2つに分け、低学年（小1～4、男15名・女18名、平均年齢8.6歳）と高学年（小5・中1～3、男10名・女22名、平均年齢12.1歳）で比較した。ポリビア人との共行動がみられたのは、低学年3人、高学年10人であり、ポリビア人との共行動がみられないのは、低学年30人、高学年12人であり、年齢による有意な差がみられた（ $x^2=7.76$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ ）。低学年では日系人同士で行動することがほとんどであるが、高学年になるとポリビア人とも行動を共にするようになるといえる。

## 3. エスニック集団への愛好——日系人生徒への面接から——

N小中学校の日系人生徒35名（男15名、女20名）を対象とし、休み時間を利用して個別に聞き取りを行った。これは標準化された面接で、質問項目は8つである。ここではそのうちエスニック集団に対する愛好を問う項目、①「ポリビア人が好きですか」と②「日本人が好きですか」を取り上げる。

結果は以下の通りである。①「ポリビア人が好きですか」について。回答を「好き」「嫌い」の2つに分け、低学年（小1～4、男7名・女13名、平均年齢8.5歳）と高学年（小5・中1～3、男8名・女7名、平均年齢12.1歳）で比較した。低学年では「好き」が7人、「嫌い」が13人、高学年では「好き」が8人、「嫌い」が7人で、ポリビア人への態度に学年による大きな差はみられなかった（ $x^2=0.55$ ,  $df=1$ , n.s.）。②「日本人が好きですか」について。日本人に

対しては全員が「好き」と答えた。生徒からみれば日本語の教師である筆者に対し、「日本人は嫌い」とは答えにくかったかもしれない。また、日本人の筆者と対面していることで生徒たちの「日本人」としての側面が浮かび上がり、それが結果に反映されている可能性は否定できない。前者の問題は生徒との信頼関係でカバーできていると考えられる。後者については、調査者の側の属性からくるこの種の研究の限界があるであろう。しかし、こうした面を勘案しても、全員が同じ回答をしているということは大きな意味を持っていると考えられる。

## 第6章 総括

N小中学校の日系人とポリビア人は、目立った差別的言動を表に出さずクラスメイトとして机を並べている。しかし、両者の間には目に見えない境界が存在し、自由行動をとるとそれが現れてくる。幼い子どもほどこの境界を越えることが少なく、日系人、ポリビア人は別々に行動する傾向が強い。高学年では、エスニック集団の境界を越える行動が増えてくる。しかし行動の変化には個人差がある。年齢が上がるに従って、一部の日系人と一部のポリビア人の間に友人関係ができてくると考えられる。

子どもはエスニック集団をどのようにとらえているのだろうか。エスニック・カテゴリーを身につけた子どもはまず、①カテゴリー・レベルでエスニック集団と関わるようになる。内集団も外集団もそれぞれ均質な人々からなると理解されていて、自己と内集団の成員との違いを十分認識していない。そして同じエスニック集団の者に対しては肯定的態度、異なるエスニック集団の者に対しては否定的態度を持つ。その後次第に集団内部の個人差に気づくようになり、②各カテゴリー内部が等質の人々からなっているわけではないことを認める段階になる。この段階では個々人の特性に目を向け始めているものの、エスニックな違いはまだ重要な意味を持っている。さらに成長すると、この違いがあまり意味を持たなくなり、③個人対個人の付き合いとなる。自分と違うところがある人に対しては、違いの原因を所属するエスニック集団に求めるのではなく、別の個性を持った人だからだと考える。①は7歳頃をピークとし、その後、青年期までに徐々に②の段階へと移行していく。②から③へは何歳頃移行するのだろうか。エスニック集団に関する態度には個人差があり、大人でも②と③が混在している。③の段階は、年齢ではなく、他のエスニック集団の者を深く理解する経験を通して形成される認識のスタイルなのではないかと考えられる。

本論の日系ポリビア人の場合、「ポリビア人が好きですか？」という問への答えに低学年と高学年で大きな差はない。日系人生徒はポリビア人に対して親近感を持ちにくいようである。しかし、集団としてのポリビア人とは距離を保ちながらも、高学年になるにつれて一部のポリビア人とは付き合いようになる。対人行動には相手との関係やその時々状況が強く反映される。本論の資料では、10歳を過ぎたころから、出会った人に向かってその人の属するエスニック集団に対する一般的態度を直接反映しない行動をとり始めるようになるということが確かめられた。

以上のように、日系ポリビア人の子どもの場合、外集団に対してはある程度距離を置いた態度を維持しつつも年齢の上昇とともに個人差を重視した関係を展開するようになる。他方、内集団に対しては年齢やポリビア人に対する態度に関わらず一貫して好意的である。内集団の成員の場合、第一段階では個人差は問題とされず、エスニック・カテゴリーを重視した関係である。エスニック集団の成員は、他の成員と何らかの文化的・身体的特徴を生得的に共有してい

るという意識を持ち、そこに原初的な愛着を感じるという（山田, 2000）。原初的愛着感は内集団の感情的な結びつきを支える。日系人生徒にとって「日本人」というエスニック・カテゴリーが重要な意味を持っているということは、彼らの間に「日本人」に対する原初的な愛着感が形成されていることを示唆していると考えられる。ボリビア人との関係において日系ボリビア人は“japonés”（日本人）と同定される。外部からの規定は、子ども時代に作られる内集団への原初的愛着感と相互作用しながら「日本人」としてのアイデンティティ形成を促している。一方、集団内部の絆は、感情的な面だけでなく手段的な面でも重要である。オキナワ移住地の日系人は、ボリビア人社会よりも日系人社会と深く関わりながら生活基盤を築いている者が多いからである。

日系人の大半は中学を卒業するとオキナワ移住地を離れ都市部の高校へ進学する。高校では、日系人のほとんどいない中でボリビア人に囲まれる生活となる。ほとんどの日系人の子どもが、高校進学後はボリビア人と親しく付き合うようになっていく。しかし多くの場合、ボリビア人との付き合いは日系人にとって、どこかにうち解けられない部分を残した関係である。「気の合うボリビア人の友人はいるけれど、心を許せるのは日系人」、と様々な年齢の日系人から聞いた。理由は、日系人とは物事に対する基本的な見方や感じ方、習慣を共有しているからであるという。

1997年の調査時に在籍していた日系人生徒55名には、父親または母親のどちらかが非日系ボリビア人の生徒11名を含んでいる。彼らは、血筋からいえば日系人であるだけでなくボリビア人でもあるが、学校をはじめコミュニティ内では日系人として扱われている。日系人生徒たちも、彼らの片親が非日系ボリビア人であることを意識している様子はない。全員が日本語校で学び、日系人による地域の行事にも参加する。日系人だけが参加する活動は日系人とボリビア人を分離する。そして、共に過ごす時間の長さは、日系人の間の絆をそれだけ強化するだろう。子どもたちの生活の中で、日本語校は日系人のみによる活動を行う主たる場である。日系人だけが学ぶ日本語の授業、日系人だけが参加する地域行事は、日系人の間にみられる原初的愛着感の形成に深く関わっていると考えられる。血筋の上で半分ボリビア人の子どもたちは、学校生活を通じて日系人として育つと考えられる。日本語校は、オキナワ移住地では言葉と同時に日本文化を子どもたちに身につけさせる場とされているが、日系人の間の絆を形成しているという点からも、子どもたちを「日本人」に育てる装置であるといえる。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、南米ボリビア共和国に戦後造営された日本人農業移住地をフィールドにして、日系人子弟とボリビア人子弟が在籍する小中学校の生徒を直接の対象に、エスニック集団に対する態度形成と実際行動の発達過程を社会心理学の立場から研究した成果の集成である。6つの章で構成されている。

第1章「課題」では、研究の目的が2点に集約される。第1の目的は、子どもたちが「日系人」「ボリビア人」というエスニック集団に対する態度をどのような身につけていくのかの発達過程を記述することにおかれる。第2は、幼児期に獲得されたエスニック集団に対する態度が学童期にどのように変化するか、また獲得された態度が現実の行動とどのように関わっている



のかを明らかにすることにおかれる。それに先だって本章では、エスニック集団間の偏見を態度の一つとして位置づけ、態度の構成要素、態度と行動との関係、エスニック集団への態度の形成、そのマジョリティ集団の所属メンバーとマイノリティ集団のメンバーとの比較などが先行研究の比較検討を通して明らかにする。エスニック集団への態度は社会化過程で獲得されることを強調して生涯発達心理学の視点を組み入れるとする。

第2章「フィールド」では、対象移住地である「オキナワ移住地」の歴史が営農の変遷を中心に記述され、調査時点現在、オキナワ移住地には約800人の日系人と3,000人を超えるボリビア人が生活するが、移住地に居住するボリビア人の多くは日系人に雇用される労働者で、エスニック集団間に対立があるわけではないが、フォーマルには行政組織も独立しており、両者間の交流は少なく、労働者階層のボリビア人に対する日系人のイメージは概して否定的で、日系人がボリビア社会へ同化していく速度を緩やかにしているとする。論者の現地調査は前後4回、延べ15ヶ月におよび、この間、日系人の通うN小中学校の日本語校においてボランティアで教師を務めるかたわら子どもたちの調査を実施し、この資料が本論の中心となっている。ボリビアでの調査と平行して日本在住のオキナワ移住地出身者の調査を群馬県で行っている。

第3章「移住者たちのライフコース—オキナワ移住地の歴史と同郷ネットワーク—」では、世代を一世、準一世、二世に大別して、各世代のライフコースが9事例をあげて面接での語りを引用するかたちで解説される。そこから、一世の時代にはオキナワ移住地という新しい故郷が造られ、準一世の時代にはアルゼンチン、ブラジルへの転住・出稼ぎにより同郷ネットワークが発生し、二世の時代には日本への出稼ぎブームに伴って同郷ネットワークがさらに日本へと拡がっていった事実を明らかにする。同郷ネットワークは、準一世と二世が移住地の外へ移動しそこで定着するのを助けた。ネットワーク内部での人の移動を容易にすることで、ネットワークの内部に生きる人たちに生活するための枠組みを提供する、すなわち同郷ネットワークが社会化のエージェントとしての機能も担っているとする。

第4章「オキナワ第2・第3移住地の学校—過去と現在—」では入植以来の学校教育の複雑な変遷が跡づけ、調査対象となったN小中学校の歴史と現状を概説する。調査時の1997年現在には、日系人生徒とボリビア人生徒の比率は1:2でボリビア人子弟の方が多かったが、1991年までは日系人生徒数が常にボリビア人生徒数を上回っていたのであり、学校の中で日系人が数の上でマイノリティになったのは比較的最近のことである。日系人生徒の家庭の多くは規模の大きな自営農であるが、ボリビア人生徒の親は日系人に雇用されている農業労働者、移住地周辺の村の零細な自営農が多い。日系人は、労働者階層のボリビア人とはたとえ同級生であっても友人関係を持とうとしない傾向があるという。N小中学校では、日系人とボリビア人の友人関係は生じにくく、ボリビア人との違いをより強く意識する環境であるとする。

第5章「エスニックな側面の発達過程—「日本人」として育つ—」では、まずエスニック・カテゴリーの内面化の発達過程が参与観察と面接データをもとに明らかにしようとする。移住地で通常「日本人」といえば日系人を、「ボリビア人」といえば非日系のボリビア人を意味するため、移住地で生まれた子どもたちは、自分は「日本人」だと感じる人が多い。ボリビア人は、日系人が“japonés”（日本人）と呼ばれ、外部からこのように認識されることで「日本人」アイデンティティを形成する一要因になっているとする。しかし、二世たちが日本に行くと「ガイジン」扱いされることが多い。そうした経験を繰り返すうち、自分の中のボリビア人としての部分、日本で生まれ育った人との違いに注意が向くようになる。ここで、「ボリビアで

生まれた人は「ポリビア人」という考えが改めて意味をもつようになる。自己のアイデンティティとして「ポリビア人」というカテゴリーが意味をもち始めるとする。次いで、日本人子弟とポリビア人子弟への面接から聞き取れる相手エスニックへの好き嫌いの態度表明と、観察される実際の行動とのずれが明らかにされる。日系人生徒35名の聞き取りではポリビア人への態度に低学年と高学年の間に有意差は見いだせなかった。しかし、生徒用に唯一ある学校の水飲み場へ休み時間にやってくる時のグルーピングの観察結果では、聞き取りでの態度表明とは異なり、低学年では日系人同士で行動することがほとんどであるが、高学年になるとポリビア人とも行動を共にするようになることが説得力をもって明らかにされている。

第6章「総括」では、本研究の目的である2つの目的、すなわち(1)子どもたちが「日系人」「ポリビア人」というエスニック集団に対する態度を身につけていく発達過程、(2)幼児期に獲得されたエスニック集団に対する態度の学童期における変化、および獲得された態度と現実の行動との関係にそって、研究の結果が要約されている。日系人とポリビア人生徒は目立った差別的言動を表に出さず机を並べているが、両者の間には目に見えない境界が存在し、自由行動をとるとそれが現れてくる。幼い子どもほどこの境界を越えることが少なく、日系人、ポリビア人は別々に行動する傾向が強い。高学年では、エスニック集団の境界を越える行動が増えてくる。しかし行動の変化には個人差がある。年齢が上がるに従って、一部の日系人と一部のポリビア人の間に友人関係ができてくる。エスニック・カテゴリーを身につけた子どもは、まずカテゴリー・レベルでエスニック集団と関わり、その後次第に集団内部の個人差に気づくようになり、各カテゴリー内部が等質の人々からなっているわけではないことを認める段階に入る。この段階では個々人の特性に目を向け始めているものの、エスニックな違いはまだ重要な意味を持っている。さらに成長すると、この違いがあまり意味を持たなくなり、個人対個人の付き合いとなる。自分と違うところがある人に対しては、違いの原因を所属するエスニック集団に求めるのではなく、別の個性を持った人だからだと考える。この最終段階は、年齢ではなく、他のエスニック集団の者を深く理解する経験を通して形成される認識のスタイルなのではないかとの結論を論者は導く。

本論文は、南米ポリビア共和国の日系人農業移住地をフィールドに、子どもたちがエスニック集団に対する態度を身につけていく発達過程、および幼児期に獲得された態度の学童期における変化、態度と現実の行動との関係の解明を主要テーマにして、日系人子弟とポリビア人子弟が在籍する小中学校の生徒を直接の対象とした調査研究の集成である。エスニック集団への態度が、エスニック・カテゴリーを重視する段階から個人特性を重視する段階へと3段階で発達していく様態を多様なデータをもとに明らかにしている。日系人子弟のポリビア人への態度には、面接による聞き取りでは学年間に有意差は見いだせなかったが、高学年になるとポリビア人とも行動を共にするようになることが水飲み場での綿密周到な行動観察から明らかにされ、言葉で表明される態度と実際の行動の異同点を確証している。最終段階は、年齢ではなく、他のエスニック集団の者を深く理解する経験を通して形成される認識のスタイルなのではないかとの結論を論者は導く。論旨の展開に淡泊さが散見されるが、日本語のボランティア教師として移住地に長期間滞在しての参与観察にもとづく知見は説得力をもち、フィールドワーク社会心理学の発展に寄与するところ大きい。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。